

「お寺の御遠忌法要を終えて」

不破 愛子

昨年の5月29日、お預かりしているお寺において、親鸞聖人七百五十回忌並びに蓮如上人五百回忌の御遠忌法要を厳修いたしました。それに先立ち、本堂を中心として境内全体の大修復を執り行いました。その際には、門信徒をはじめとして地域の皆様に御寄付をお願いし、約4年の年月をかけて完成へと至りました。法要当日は、台風と梅雨の影響で大荒れの天候になってしまいましたが、稚児をはじめ、大勢の方にお参りしていただきました。本当にありがたいことでした。

そんな中、私はふと「お寺とはどういう場所なのか」ということを考えました。目まぐるしく変わりゆく現代社会において、お寺のあり方も少しずつ変化しています。かつては、地域の中心であり、人々の「喜怒哀楽」すべてを包み込む場所であったように思います。しかし、今日の情報社会に生きる中で、人々はお寺を訪ねるとか、お寺に集うとか、ということから足が遠のいているように思えてならないのです。宗祖である親鸞聖人は、比叡山での厳しい修行を続けられた末、自分一人さえ苦悩から救うことができないのに、世の人々を救うことなどできるのだろうかという疑問にぶつかったそうです。その後親鸞聖人は山を下りられ、民衆と共に生き、共に語り合い、阿弥陀如来の本願は全ての人々にかけていると信じ、人々と隣り合わせでお念仏の教えを広めていきました。

私は今回の御遠忌法要を通して、親鸞聖人が現代社会に生きる私たちとお寺をつないでくださったと感じております。お寺は決して敷居の高い場所ではありません。多くの方に、これからも足を運んでいただき、お念仏の教えに触れていただけたらと願っています。